

京都女子大学図書館所蔵『方丈記』 元治元年写本

——「聴雨大人」林蓮阿校正本——

中 前 正 志

京都女子大学図書館が所蔵する『方丈記』の写本あるいは版本計二十三点については、拙編『東山中世文学論纂』（私家版、平26）に「略目録稿」を掲載したうえで、そのうちの④「元亨」「文亀二年」本奥書写本の翻刻と②③吉沢本の影印を掲げて、若干の検討を加えておいた（④）「②③」は「略目録稿」に付した各本の番号、以下同）。また、本誌第十二号収載拙稿では①元和三年写本、同第十七号収載拙稿では③「細川友済」本を、それぞれ取り上げて、やはり翻刻したうえで若干の検討を加えておいた。さらに、『女子大国文』第一六四号収載拙稿には②慶安五年写本の翻刻を掲げるなどしている。これらは、二十三点のなかでは年代的に遡るもの、あるいは遡る可能性を持った本文を有するものであるが、今回取り上げようとする②元治元年（一八六四）写本（914.42/A6 008510505-8）は、逆に、書写年の明らかな写本のうち年代の最も下るものである。もう明治維新も間近に迫った時期の、言わば最末流の写本である。

そんな②は、例えば、長明の時点の本文を厳密に復元しようとする検討や、古本系と流布本系の分岐点に迫ろうとする検討にとっては、全く無意味な存在に違いなだろうか、『方丈記』本文流転史とも言うべきものの構築を目指して、『方

丈記』本文が流転していく先、その最末流のあり方を見定めようとする際には、相応の意味を持ち得るだろう。そこで、そうしたことを遠い目標として念頭に置きつつ、小稿において、②を翻刻したうえで、その基本的な性格などをめぐって少々検討を加えておきたいと思う。

先の「略目録稿」には、②の書誌事項などについて、不十分ながら次の通り記しておいた。検討に当たっては、これが出発点となる。

袋綴一冊。縦二八・四×横二〇・三cm。表紙以外全二丁（うち前遊紙一丁）。灰色無地表紙。楮紙。外題「長明方丈記」（左上金箔散らし題簽に墨書。内題なし。一面一行。漢字交り平仮名文。本文補入など朱の書込みあり。「月影は」歌あり。奥書「此書は聴雨大人の校正本を以て写せり。普／通のいか、あるべきと思ふ節なく、元書とも／いふへく、めてたき文巻にそ有ける。然は／あれとわか写し誤れる必多かるへし。／文字は大人の書を臨して似るをむね／とかければ、おをのたかひは筆の／はしるにまかせていとみたりなり。／見むひとゆるしてよ。／元治元年歳在甲子十一月晦日／浅茅原隠士平宗悦書也」。前表紙右上に朱書「聴雨校正本」、その下に陽刻朱長方印「物語」。前遊紙表に陽刻朱長方印「宝玲文庫」「黒川真頼藏書」および不明陽刻朱正方印あり。本文冒頭に陽刻朱長方印「黒川真道藏書」。前表紙見返しに紙片貼付、「玉海安元三年四月廿八日云……」と墨書。最終丁の表と裏および後表紙見返しにもそれぞれ紙片貼付、『東斎随筆』長明記事・「新勅撰和歌集」卷十「月影は」歌・『醍醐随筆』「於方丈石上戲作」を墨写（『醍醐随筆』墨写末に「右抄中山三柳醍醐随筆 聴雨」）。『黒川文庫目録』（書誌学大系86—1）登載の282「長明方丈記 聴雨校正本〈写〉」に相当しよう。

*

右に引用している書写奥書を記した「浅茅原隠士平宗悦」については、今のところ全く情報を得ることができていな

い。しかし、その書写奥書が冒頭に「此書は聴雨大人の校正本を以て写せり」と明かしている中に見える親本の筆者「聴雨大人」の方は、いかなる人物なのかある程度つきとめられそうである。「聴雨」と号する人物は少なくないようだが、右引略目録稿に述べている通り、末尾部に貼付された紙片に『醍醐随筆』を引用して「右抄中山三柳醍醐随筆 聴雨」と記しているので、『醍醐随筆』が刊行された寛文十年（一六七〇）より以降の人物であることは確からしい。また、右引書写奥書によれば、「文字は大人の書を臨して似るをむねとかければ」、すなわち聴雨の自筆本を親本として臨写していて、同自筆本は「元書ともいふへく、めてたき文巻」であったという。そうであるからと言うわけではないけれども、聴雨は、宗悦が書写した元治元年からそれほど隔たっていない時期の人物ではないかという印象を受ける。

頼りない右の印象に縋って探索するに、候補者の一人として、天保十一年（一八四〇）に六十二歳で没した、石津亮澄という国学者が浮上してくる。飯田正一「石津亮澄とその歌集」（関西大学『国文学』28、昭35）、横山邦治「読本評判——『昔語松虫墳』六聴雨軒文化八年刊」（『文教国文学』19、昭61）、管宗次「石津亮澄について」（『武庫川女子大学紀要（人文・社会科学）』58、平22）といった研究がすでに積み重ねられており、「狂歌にも名所図会にもと雑多な著作があり、和歌にも適切な入門書を数多く世に送り出す、商都大坂にはふさわしい学者であった」とされる（管論文）。多数ある著作のうち読本において「聴雨軒」と号したようで、実際、文化八年（一八一）刊の絵入読本『昔語松虫墳』の自序末に「聴雨軒」と記していることが知られる。しかし、同書の評判が必ずしもよくなかったからなのか、「読本作者たることに想いを絶った聴雨軒は、それ以後石津亮澄として通俗啓蒙的な著作をものする国学者、歌人として、浪速にその身を樹てた」という（横山論文）。つまり、聴雨軒と号したのは、読本作者であった若い時期に限定されるようで、元治元年（一八六四）に宗悦が「聴雨大人」と記した人物とは、別人であるように思われる。

可能性が高いと見られるのは、林蓮阿である。蓮阿については、風間誠史「林蓮阿の文業——近世和文史における意

義——」（『相模国文』25、平10）に詳しい。「天保九年（一八三八）に江戸で没したことは確かだが」、享年は不明。最初の編著『かりの行かひ』を刊行した享和二年（一八〇二）の頃が「三十代として明和年間（一七六四―一七七二）あたりが生年だろうか」とされる。風間論文には、出版を企画・実行した書も含む著作一覧が作成されていて、計十三点の著作が挙げられている。先の『かりの行かひ』のほか『文章梯』『消息文梯』『文苑玉露』が和文関係で、他の九点が和歌関係、うち七点が『和歌類題集』『紅塵和歌集類題』といった類題集になっている。「類題集の専門家という感じが強い」「京都の歌人」、「ひたすら実作のための啓蒙書・手引きを作り、和文の普及に取り組んだ」人物であって、「特定の流派に属さ」ない「折衷的な国学啓蒙家ということになるのか」とされる。

風間論文所掲の著作一覧によると、文化十二年（一八一五）刊『消息文梯』が序に「聴雨庵」と記し、文政二年（一八一九）刊『中古和歌類題集』の自跋と刊年不明『仮名類題和歌集』の自序に「聴雨庵蓮阿」とある。また、風間論文に引用されてもいるが、『平安人物志』の例えば文政五年版にも「林茂樹（号蓮阿又号聴雨庵／伏見御香宮）蓮阿」と見える（巻中「和歌」）。「聴雨庵」という庵号が和文関係であれ和歌関係であれ広く使用され、また知られてもいたようである。風間論文は、「庵号として一時は百合園、のち聴雨庵」とする。また、『近世文芸家資料綜覧』（東京堂出版、昭48）も「号」は聴雨庵、百合菴。さらに、風間論文には、「刊行されたかどうか未詳」のものとして、「文化末年頃と推定される京都恵比寿屋『和書目録』（巻末広告）に、『仮名用格』という書が『聴雨庵蓮阿人編／中本／追彫』として載」（傍点稿者）ることが指摘されている。今、特に注意されるのは、蓮阿没後に遺稿を門人が編集した『和歌言葉の千種』。繰り返し刊行されており、弘化三年（一八四六）刊本や嘉永五年（一八五二）刊本に「聴雨庵大人（遺稿）」と見える。つまり、元治元年（一八六四）の先引奥書に平宗悦が「此書は聴雨大人の校正本を以て写せり。……文字は大人の書を臨して似るをむねとかければ……」と記したのと近い時期に同様に「聴雨庵大人」と称されているのであって、奥書に

言う「聴雨大人」「大人」とは、林蓮阿のことと見てほぼ間違いないだろう。右の奥書を記した平宗悦も、その蓮阿の門人かそれに近い人物であるかもしれない。

以上の通りだとすれば、②元治元年写本は、林蓮阿が校正を加えた、そして先述通り蓮阿の自筆らしい『方丈記』を、元治元年に書写したもの、ということになる。校正を加えながら『方丈記』を書写するという作業を蓮阿が行っていたことが判明するとともに、そうして成った蓮阿自筆本を、平宗悦による書写越しに窺うことが、この②によって可能となるのである。そのことが蓮阿研究にとってどの程度の意味を持ち得るのか否か、全くの門外漢である稿者にはわからないが、「林蓮阿の文業」へと繋がっていく営為の一つとして捉えておいてよからうか。

*

②元治元年写本は、本文としてはまず、略本でなく広本であり、広本のうちでは基本的に、古本系でなく流布本系のものである。古本系と流布本系とを分かつ主要な指標として、通常、

a 土塀が崩れてある武士の子が圧死したという内容が大地震の叙述の中に、流布本系では加わっているが、古本系にはそれがない。

b 日野山奥の方丈の庵の様相を叙述した文章が、古本系と流布本系とで大きく相違する。

c 「おほかた世をのがれ……をり／＼の美景に残れり」の一小節が結末部に、流布本系には存するが、古本系にはそれが無い。

という三点が挙げられるが、元治元年写本の場合は、三点いずれも流布本系の特徴を示しているのである（a 後掲翻刻 182～191 行、b 同 259～275 行、c 同 385～390 行）。

しかし、完全に流布本系の本文になっているわけではない。青木伶子『広本略本方丈記総索引』（武蔵野書院、昭40）

において対照されている古本系十一本と流布本系六本との間で本文がほぼ完全に対立している箇所のうち、右のa～cを除いた九十箇所ほどについて、元治元年写本の本文を確認するに、およそ二割ほどは古本系の本文になっている。特に五大災厄を描いた部分を中心に、両系統の本文が相半ばするくらいに混在しているようである。例えば、

74 誰か一人故郷に残らん 〈古本系「残りをらん」〉 *古本系本文を朱書傍記する。

90 川もせきあへす運ひ下す 〈古本系「せに」

142 白かね・こかねのはくなど 〈古本系ナシ〉

などは流布本系の本文だが、

41 まして其外^ハ数へ記すに及はず 〈流布本系「数しらす」

124 さま／＼の宝物 〈流布本系ナシ〉

150 必先たちて死ぬ 〈流布本系「死す」

などは、古本系の本文になっている（数字は後掲翻刻の行番号。複数行に亘る場合は最初の行の番号のみ示す。その他、後掲翻刻凡例・校異凡例参照。以下同）。あるいは、

133 ありくかとみれば則たふれ臥死ぬ

の場合は、古本系本文「ふしぬ」と流布本系本文「しぬ」が合体したような形になっている。総じて言えば、元治元年写本の本文は、基本的には確かに流布本系の本文であるに違いないのだけれども、純粹な流布本系本文というのではなくて、そこに古本系本文がかなり混入した本文となっているのである。

流布本系本文をより多く採用しつつ古本系と流布本系とを接合した形の刊本として、扶桑拾葉集収載本のあることが知られる（築瀬一雄著作集二『鴨長明研究』（加藤中道館、昭55）「方丈記伝本考」や草部了円『方丈記諸本の本文校訂

に関する研究』〈初音書房、昭41〉「扶桑拾葉集本方丈記の成立について」参照。また、群書類従本も、奥書に

右長明方丈記以印本及扶桑拾葉集校合畢

と見え、

蓋し本文は印本即ち正保板本等と拾葉集本とを折衷した如きものである。

（吉澤義則『校異本文方丈記諸抄大成〉（立命館出版部、昭8））

如何なる本を底本とせしかは明かならねど、校合に用ゐし『印本』は正保板本の如し。本文の根幹は大体に流布本系統のものなれど、扶桑拾葉集の本文を比較的多く取入れしため、いづれの本とも一致せざる特殊の本文を形成せり。

（鈴木知太郎「方丈記諸本解説略」『方丈記』（宝文館、昭18））

と説かれている通り、扶桑拾葉集本と共通するところがあつて、やはり両系統の本文が混在したものとなっている。ただ、より純粹な流布本系の本文を有する正保版本などが校合本に加えられた結果か、扶桑拾葉集本に比べて流布本系の本文の度合が大きくなっているようである。元治元年写本と同様に両系統の本文が混在した、しかし、その混在の度合が両者で異なる、これら扶桑拾葉本と群書類従本、さらには、より純粹な流布本系本文と言えるであろう正保版本を加えて、計三本と元治元年写本とを見比べることとしたい。正保版本は国立国会図書館所蔵村上平樂寺版（857・80）、扶桑拾葉集本は京都大学文学研究科図書館所蔵版本（国文学研究資料館蔵本）、群書類従本は国立国会図書館所蔵版本（127-1）に、それぞれ拠る。

例えば京都女子大学図書館が所蔵する『方丈記』伝本二十三点に限っても、先の略目録稿に指摘した通り、⑨⑩は正保版本（⑨⑩＝無刊記本、⑪＝勝村治右衛門版、⑫＝松会版）で、⑮宝暦五年（一七五五）写本は扶桑拾葉集本の忠実な写しであり、⑳文政十二年（一八三一）写本は正保版本の写しのようであり、また、略目録稿にて推測を示し、先

述の『女子大國文』第一六四号収載拙稿にて確認したことが、②慶安五年写本においては扶桑拾葉集本との校合が文政七年に加えられており、さらに、略目録稿には指摘し得ていないが、⑬は、末尾に「右長明方丈記以印本及扶桑拾葉集校合畢 時 文政六未年十月三日」と、群書類従本の先引奥書が掲げられていて、同本の写しと見られる。これらのことだけからでも窺えるように、比較対照しようとする右の三本は流布・普及しているのであつて、それらあるいはそれぞれの同類本は、元治元年写本の親本を校正・書写した林蓮阿の目に触れる可能性の高いものであるに違いない。

*

後掲翻刻の下段に、「正保版本・扶桑拾葉集本・群書類従本との主要校異」を付載した。無論、それら三本いずれも流布本系のものであるので、三本の間で一致している本文が相当地に広く見られ、その本文が、やはり先述通り基本的に流布本系である⑭元治元年写本とも一致している、つまりは計四本とも本文が共通している、という状況も広く認められる。が、その一方で、それらの間で種々の相違が拡がっているのも確認し得る。

元治元年写本の本文が三本いずれとも異なるという相違も数多く見られる。しかし、それら相違は、

9 住人―すむ人も（正・扶・群） * 朱書された傍記「も」を補入した本文は三本と一致。

10 古へに―いにしへ（正・扶・群）

258 外に―外は（正）外は（扶）外には（群） * 扶に注記された異本本文とは一致。

（行番号の下が元治元年写本本文、「正」は正保版本、「扶」は扶桑拾葉集本、「群」は群書類従本。振り仮名など省略した場合がある。以下同）

というような微細な差異、あるいは、

29 ことく―とかく（正・扶）とく（群）

102 むなしからすからざりければ—むなしからざりければ（正・扶・群） *墨書・朱書傍記が傍線部を抹消。

104 帰り給ひぬにき—かへり給ひにき（正・扶・群） *墨書傍記が傍線部を抹消。

222 人をたのめは、心恩愛につかはる—人をたのめば、身他のやつことなり、人をはぐくめは、心恩愛につかはる（正・扶・群） *朱書された傍記を補入した本文は三本と一致。

といった、元治元年写本文のいずれかの段階での単純な誤写から生じたことが推測されるような差異（29「ことく」の場合、正保版本・扶桑拾葉集本の「とかく」からはそれほど単純には派生し難いかもしれないが、群書類従本の「とかく」からは、その誤写によってかなり容易に生じ得るであろう）に、概ね限定されている。先引奥書は「聴雨大人の校正」を親本としたとするが、「聴雨大人」蓮阿がいかなる「校正」をどの程度行ったものかわからず、蓮阿校正本の段階で誤写が生じていた可能性もあろうし、また、先引奥書は「わか写し誤れる必多かるへし。……おをのたかひは筆のはしるにまかせていとみたりなり。見むひとゆるしてよ」と記しており、宗悦書写の段階での誤写も少なくないかもしれない。

これら確認してきた状況は、三本いずれからも派生し難い、それらいずれからも大きく逸脱したような本文が、元治元年写本にはあまり見られない、少なくとも三本いずれかには相当に近い、ということを意味しているであろう。

次には、三本それぞれとの異同を個別に眺めてみたい。三本の本文が三者三様に分かれている場合はほとんどないので、そういう箇所注目して元治元年写本がいずれの本と近いのか判定するということではできない。また、三本いずれとも異なる右の場合も含めた、三本それぞれと元治元年写本とが相違する箇所は、個数的に三本間で大差はない。しかし、各本との相違のあり方などは、異なっている。およその傾向としては、正保版本との相違には比較的大きなものが目に付き、逆に群書類従本との相違には大きなものが少なく、扶桑拾葉集本との相違は、一部を除いてそれらの大体内

簡的狀況を示しているようである。

三本いずれとも異なるのではなくて、三本のうち扶桑拾葉集本・群書類従本とは共通しているのに、正保版本とだけは異なっているという箇所が、元治元年写本にはかなり多く見られる。その中には、仮に正保版本から元治元年写本へという流れを想定した場合、正保版本の本文だけから元治元年写本の本文が単純には生じ難いであろうと見られるような事例も、

8あるは去年焼、今年は作りて、^{あるは}大家ほろひて小家となる―あるは大家ほろびて小家となる 41数へ記すに及はず―かずしらず 69異なる故なくて―ことなくて 124さまくの宝物―宝物 150先たちて死ぬ―死す 156慈尊院の大藏卿隆暁法印―隆暁法印 159^額ひたいに阿字を書いて―阿字を書いて 243大原山の雲に臥て、また五帰りの春秋をなむ經にける―大原山の雲にいくそばくの春秋をかへぬる 392宮殿樓閣も望なし―宮殿望なし

(棒線の上が元治元年写本、下が正保版本)

と、少なからず存する。しかし、その一方で、

27灰―塵灰(扶・群) 74残^りらん―残りをらん(扶・群) 122なにはにつけても―なにわさにつけても(扶・群)
220はなれかたし―はなはたし(扶・群) 246^な狩人―旅人(扶・群) 278林軒近ければ―林の木近ければ(扶) 林の軒近ければ(群) 364すへき―なすへき(扶・群) 368似す―しかす(扶・群) 374うこく―働く(扶・群) 382かやうの事、たのしく富る人に―かやうのたのしみ、富る人に(扶・群)

(棒線の上が元治元年写本、下が扶桑拾葉集本・群書類従本)
など、元治元年写本が逆に、扶桑拾葉集本・群書類従本とは異なっていて、正保版本とのみ一致するという箇所が、特に細部の表現を中心に、際立って多く見られる。

元治元年写本が三本のうち正保版本とのみ相違あるいは一致する右の二つの場合を合わせれば、正保版本が他の二本、扶桑拾葉集本・群書類従本いずれとも本文が異なるという事例のほぼすべてということになるので（右二つの場合以外、先に見た、元治元年写本が三本いずれとも異なっている場合には、その三本の本文が共通している事例が多く、正保版本だけが他の二本と本文が異なるという事例はごく少ない）、右の二点から、正保版本が他の二本いずれとも異なる場合、元治元年写本は、細部の表現など正保版本の方と広く一致しているが、一方で、正保版本でなく扶桑拾葉集本・群書類従本と一致する場合も目に付く、というおおよその傾向を看取することができよう。

扶桑拾葉集本の場合、古本系と流布本系とを分かち指標として先に掲げたうちりの箇所が、古本系本文を基軸とした本文になっており、その点、先述通り流布本系の本文となっている元治元年写本あるいは正保版本・群書類従本と大きく異なる。それ以外、正保版本・群書類従本とは共通しているのに、扶桑拾葉集本とだけは異なっているという箇所が、元治元年写本にはいくらか見られる。ただし、先に見た正保版本だけが異なっているという事例の半分ほどと、個数的にはかなり少なくなっている。しかし、扶桑拾葉集本本文（同本に注記された異本本文も含む）だけからは元治元年写本本文が生じ難いと思われるような事例、あるいは両者比較の大きく相違するような事例も、

16 あらそひ去さま—あらそふさま

361 賞罰のはなはたしきをかへりみ—賞罰のはなはたしく

364 もしすへき事あれ

は—いは、我身^{イモ}を奴婢とするならば、もしなすへき事あれは 418 た、側に—た、に

（棒線の上が元治元年写本、下が扶桑拾葉集本）

と、いくらか見受けられる。そして、特に注意されることには、正保版本とは反対に、元治元年写本が他の二本とは異なっていて扶桑拾葉集本とのみ一致するという箇所がほとんどなく、あるいは皆無に等しいのである。

先に正保版本について窺ったのと同様に、扶桑拾葉集本とのみ相違あるいは一致する、右の二つの場合を総合して言

えば、三本のうち扶桑拾葉集本だけが他の二本と異なる場合、元治元年写本は、扶桑拾葉集本とは概ね一致せず、ほとんど正保版本・群書類従本の方と一致する、ということになる。先述通りbの箇所が扶桑拾葉集本と大きく異なる点をも勘案するに、元治元年写本には、三本の中の扶桑拾葉集本独自の特色がほぼ反映していないのだと言えよう。

正保版本・扶桑拾葉集本とは共通しているのに、群書類従本とだけは相違する箇所も、元治元年写本の中に

18 かれぬ—かくれぬ 34 風に絶す吹きられたる炎—堪す吹きられたる炎 205 かくのとし—またかくのとし 213

まつしうして—まつしう 237 あらぬ—あられぬ 271 文机をつくり出せり—ふつくえを出せり 311 うら、かなれは—

うららなれは 366 やすし—やすく (棒線の上が元治元年写本、下が群書類従本)

など、少なからず見られる。しかし、その相違は概ね微細なもので、右に見てきた、正保版本のみとの相違箇所、扶

桑拾葉集本のみとの相違箇所にして、大変小さい。一方、他の二本とは異なり群書類従本とのみ一致する事例も

6 すま^住ひ—すまゐは (正・扶) 47 廿九日—廿九日の比 (正・扶) 81 馬鞍—た、馬鞍 (正・扶) 217 やすらかなら

す—やすからず (正・扶) 285 こと—と (正) かと (扶) 313 なくさむる—慰むるに (正・扶) 334 今既に—今迄に (正・

扶) 354 故いかんとならば—故いかむとなれば (正・扶)

(棒線の上が元治元年写本、下が正保版本・扶桑拾葉集本)

と、いくらか見られる。ただ、他の二本とは異なると言ってもそれらとの相違はやはり小さい。群書類従本は、先引『^校方丈記諸抄大成』が指摘する通り、正保版本と扶桑拾葉集本とを折衷したような本文になっているのだから、それら両本を含めた三本の中で群書類従本だけが異なる場合の相違に大きなものがないのは、当然でもあろう。

しかし、少々目立つ事例も見られる。元治元年写本に

132 身よろしきすかたしたる者、ありくか^とと見れは

と見える箇所、正保版本と扶桑拾葉集本ではともに、

身よろしきすかたしたる者、ひたすら家ごとに乞ありく、かくわびしれたる者ども、ありくかとみれば

と、傍線部が加わっている。元治元年写本は、目移りによつて傍線部が脱落した本文を記しているのだと推測されようが、群書類従本も元治元年写本と同様になっているのである。元治元年写本と群書類従本との距離の近さを特に窺わせようか。

錯綜していて明快には見定め難いが、以上のことを総合するに、元治元年写本は、古本系と流布本系を折衷した扶桑拾葉集本と正保版本とを折衷したような群書類従本と、正保版本とをさらに折衷したような本文になっている、と言えようか。それは、折衷に折衷を重ねたより一層純度の低い、そういう意味でいかにも最末流の写本らしい本文ということになる。あるいはまた、正保版本を基盤としつつ、そこに群書類従本を盛り込んだような本文になっている、扶桑拾葉集本独自の要素は見られないが、群書類従本に反映しているところのある扶桑拾葉集本とも、結果として近い面を持つ、と言い換えることもできようか。右の通りだとすれば、「聴雨大人」蓮阿は、正保版本あるいはそれに類するものを軸に、群書類従本あるいはそれに類するものを合わせて、「校正」したのである、と言えるかもしれない。

*

正保版本・扶桑拾葉集本・群書類従本の三本いずれからも派生し難い、それらいずれからも大きく逸脱したような本文が、元治元年写本にはほとんど見られない、と先に述べたが、しかし全くないわけではない。そのような、元治元年写本に特徴的と言ふべき本文が、二箇所に見られる。

養和の飢饉を描いた中の一節、元治元年写本は、

148 さりかたき女男なともちたる者は、其思ひ増りて死をいそぎ必先たちて死ぬ。

と記す。対応する箇所、大福光寺本では、

サリカタキ妻オトコモチタル物ハ、ソノヲモヒマサリテフカキ物必サキタチテ死ヌ。

となっていて、特に実線部が相違している。その実線部は、青木伶子編『広本略本方丈記総索引』の取り上げる、大福光寺本以外の古本系十本では、保最本が「ふるき者は」とする以外、「ふかき」を「深き」、「物」を「もの」「者」と表記する場合もあるし、保最本と同じく助詞「は」を加えるものもあるが、すべて大福光寺本と一致する。保最本の異文「る」も単純な誤写によって生じたものである可能性が高いだろう。また『広本略本方丈記総索引』が取り上げる流布本系の六本は、正保版本に至るまでいずれも「ふかきは」となっている。大福光寺本の「物」が「は」になった形（「物」が「者」と表記されたところから生じたか）だが、意味的な相違が生じるような異文では全くない。すなわち、先の実線部の本文は、『広本略本方丈記総索引』の取り上げる計十七本の間には大きな差異なく、ほぼ安定しているのである。それに対して、元治元年写本の本文「死をいそき」は、その安定を鋭く切り裂くような甚しく異なった本文となっている。こうした本文は、いかにして生まれたのだろうか。その発生経緯を十分に明かすことはできないけれども、臆気ながら臆測されるところはある。正保版本は先述通り「ふかきは」だが、扶桑拾葉集本は「志ほかきは」とする。先引大福光寺本の波線部「ヲモヒ」は、流布本系の伝本では「心さし」「志」となっていて（扶桑拾葉集本・群書類従本・元治元年写本では「思ひ」、古本系でも氏孝本が「心さし」、名古屋本が「志」としているから、その「志」が「ふかきは」の上に加わり、さらに「ふ」が「ほ」に置き換わったのが、扶桑拾葉集本の本文「志ほかきは」であると言える。そして、群書類従本は、「志ほそきは」とする。同本は、先述通り扶桑拾葉集本を校合本の一つとしているのであって、その「志ほそきは」は、扶桑拾葉集本の「志ほかきは」の「か」が「そ」に変じて生じたものと見られよう。元治元年写本の「死をいそき」は、その群書類従本の「志ほそきは」から派生してきたのではなからうか。「そき」を共

通して含むほか、「志」は「し」さらに「死」と転じ得るだろう。臆測するに、意味不明となっていた群書類従本文「志ほそき」に蓮阿が「校正」を加えて、何とか前後意味が通じるようにしたもの、それが、元治元年写本の「死をいそき」でなかったろうか。そうだとすれば、やはり最末流写本らしい、流転を繰り返した先の本文だということになる。

概ね右臆測の通りであったとしても、群書類従本そのものに基づいたとは限らないだろうが、それでも、前節末に述べたことと共に、元治元年に平宗悦が書写した際の親本が、群書類従本以降のものであるらしいということを示唆することになるだろう。また、その親本が「聴雨」による「校正」の加わったものであるから、右のことは、「聴雨大人」を天保九年に没した林蓮阿であろうとした先の推測と、年代的に符合することにもなる。

今一つの特徴的本文。大福光寺本に

若ウラ、カナレハ、ミネニヨチノホリテハルカニフルサトノソラヲノソミ、コハタ山フシミノサト鳥羽ハツカシヲ
ミル勝地ハヌシナケレハ、心ヲナクサムルニサハリナシ。

と記されるうち、「勝地」たる洛南の各地を列挙した箇所（傍線部）は、『方丈記』本文流転史においても長らく揺れ動くことのほとんどなかった本文である。多くの場合「木幡山」「伏見の里」「羽束師」と漢字が宛てられたほか、「はつかせ」と誤写されたり（兼良本や近衛家本）、「鳥羽」が脱落してしまったり（学習院大学本）はしたが、それら以外の目立った異文は、青木伶子『広本略本方丈記総索引』にて取り上げられた、古本系十本と流布本系六本の計十六本の広本においては発生していない。それだけではない。「流布本代表を網羅した」という吉澤義則『^本方丈記諸抄大成』が対校本として採用したうち右十六本以外の、扶桑拾葉集本・群書類従本、首書・泗説・盤斎抄・諺解・流水抄の近世注釈書の各収載本文においても、あるいはその他管見の限りの諸伝本においても、同様である。

ところが、そんな状況のなか、最末流とも言うべき元治元年写本に至って

310もし日うら、かなれは、峯によちのほりて、遙に空を望み、木幡山・伏見の里・鳥羽恋塚・はつか師を見ル。勝地

は主なければ、心をなくさむるさはりなし。

と、目に付く異文が出現している。「鳥羽」と「はつか師」の間に「恋塚」が加わっているのである。

「恋塚」と言えば、有名な袈裟御前の墓と伝わる恋塚が、横恋慕した袈裟御前の首をはねてしまった文覚によって開かれたという上鳥羽の浄禅寺と下鳥羽の恋塚寺にそれぞれ、今も存する。そして、浄禅寺の方に立つ正保四年（二六四七）建立恋塚碑には「鳥羽恋塚者、文覚為源渡妻所築也。……」と始まる林羅山による銘文が刻まれているし、遡って謡曲

『卒都婆小町』（日本古典文学大系）に「木隠れて由なや。鳥羽の恋塚、秋の山」と見える（伊藤宗裕『京の石碑ものがたり』（京都新聞社、平9）等参照）。また、明暦四年（一六五八）刊『京童』（新修京都叢書）巻四は「鳥羽の恋塚」の項目を設け、その末尾には「恋づかの石よりかたき人こ、ろ／鳥羽かりいふはいふにたらずよ」と記してもいるし、黒川道祐『近畿歴史記』のうち『嵯峨行程』（新修京都叢書）の「上鳥羽」条には「こい塚有。里人は是を鳥羽の恋塚」といふ。一説恋塚は下鳥羽恋塚寺に有。爰なるは鯉を埋めし塚といへり」とある。蓮阿が没した天保九年（二八三八）の成立『十国巡覧記』（史料京都見聞記）にも、「下鳥羽村に入。道の右に恋塚浄禅寺と刻みたる石あり。小庵の傍に源渡が妻袈裟の塚あり。是所謂鳥羽の恋塚也」と見える。室町物語には『恋塚物語』があるが、近世になると、『鳥羽恋塚物語』や『貞操花鳥羽恋塚』といった、「鳥羽恋塚」をタイトルに含んだ作品が知られもする。近世には、鳥羽と恋塚の結び付きあるいは一体化が、どんどん深まっていたようである。

右のような状況が反映して、本来の本文「鳥羽」の下に異文「恋塚」が入り込むことになったのだろう。これもまた、近世も終わりに近い時期の末流本文ならではの現象だと言ってよからうか。あるいは、林蓮阿が京都の歌人であったことを想起してもいいかもしれない。例えば先引文政五年版『平安人物志』が蓮阿について「伏見御香宮」と記し

ていたが、その「伏見御香宮」から浄禅寺・恋塚寺まではおよそ二、四キロメートルしか離れていない。

元治元年写本『方丈記』翻刻および正保版本・扶桑拾葉集本・群書類従本との主要校異

【翻刻凡例】

- ・ 翻刻に際しては、基本的に通行字体に改めるとともに、私に句読点等を施した。
- ・ 行送りは元のままとし、行番号を五行ごとに行頭に付した。また、半丁ごとに、その末尾を「で示した。
- ・ 先引略目録稿には「本文補入など朱の書込みあり」と記したが、各行右または左の傍記のうち、68・79・102（「す」）・104・117・136・157・170（抹消線）・253・346（「を」）・359・380・387行のもの以外が、朱別筆によるものである。

【校異凡例】

- ・ 翻刻の下端に、正保版本（正）・扶桑拾葉集本（扶）・群書類従本（群）を対校本として、主要校異を掲げた。
- ・ 「3」などは、元治元年写本翻刻の行番号で、その下は同本の本文。複数行に亘る本文の場合、最初の行の番号のみ示す。
- ・ 棒線の下が、対応する対校本の本文。対応する本文がない場合は「ナシ」と記す。（）内は、対校本の略称。
- ・ 先述通り、元治元年写本には本文補入などの傍記が見られるが、それらは校異の対象外とした。
- ・ 漢字と仮名の違いや仮名遣いの違い、振り仮名の有無などは、基本的に校異として取り上げていない。また、扶桑拾葉本には異本注記が多く見られるが、本来の本文が元治元年写本と一致していれば注記された異本本文は度外視した。注記された異本本文の方が元治元年写本と一致している場合は、校異として取り出した。
- ・ 基本的に同一である複数の対校本の本文を掲げる場合、（）内の最初に示した対校本の本文を掲げた。なお、対校本の本文を掲げる際には、概ね振り仮名などは省略した。

元治元年写本『方丈記』

行川のなかれは絶すして、しかもものと

水にあらず。淀^ミにうかふうたかたは、かつ

きえかつむすひて、久しくと、まる事なし。

世の中にある人と住かと、またかくのことし。玉敷の

5 みやこのうちにむね^棟をならへ、いら^衆かを

あらそへる、たかきいやしき人のすま^住ひ、代々を

へて尽せぬものなれと、是をまことかと尋れは、

むかしありし家は稀也。あるは去年焼、今年

は作りて、大家^{あるは}ほろひて小家となる。住人^もこれに

10 おなし。所もかはらず、人も多かれと、古へにみし人は

二三十人中にわつかに一人ふたりなり。朝に 「1才

死し、夕に生るならひ、唯水のあ^沫はに似たりける。

しらす、うまれ死ぬる人、何方より来りて、何

かたへかさる。またしらす、かりの宿り、たかために

15 心を悩し、何によりてか目をよろこはしむる。その

あるしとすみかと無常をあらそひ去さま、いは、

朝かほのつゆに異ならず。あるは露落て花

正保版本・扶桑拾葉集本・群書類従本との主要校異

2 淀^ミ—よどみ (正・扶・群)

3 と、まる—とまる (正)

6 すま^住ひ—すま^住あは (正・扶)

8 あるは去年焼、今年^{あるは}は作りて、—あるは (正) あるは去

年^{けつ}やふれて、今年^{れり}は作り、あるは (扶) あるは去年やけ、

今年^もは作り、あるは (群) 9 住人—すむ人も (正・扶・群)

10 古へに—いにしへ (正・扶・群)

12 生る—むまる、 (正・扶・群)

13 何かた—いつく^{つかた} (扶) いつく (群)

14 ために—為にか (群)

16 あらそひ去—あらそふ (扶)

残れり。のこると雖あさ日にかれぬ。ある

ははなはしほみて露猶消す。きえずといへとも

20 夕を待事なし。凡物の心をしれりしより

此かた、四十あまりの春秋を送るまに、世の不思議をみるこことや、度々になりぬ。去安元三年

四月廿八日かよ、かせはけしく吹てしつか

ならさりし夜、戌の時はかり、みやこのたつみ

25 より火出来ていぬぬにいたる。はてには朱雀

門・大極殿・大学寮・民部省などまでうつりて、

一夜かほとに灰と成にき。火本は樋口富小路

とかや。病人をやとせるかりやより出来けると

なむ。吹まよふかせにことくうつり行程に、

30 あふきをひろけたることく末広になりぬ。

遠き家はけふりにむせひ、近きあたりはひた

すら炎を地に吹つたり。空には灰を吹たて

たれば、光に映してあまねく紅なる中に

風に絶す吹きられたる炎、とふか如にして

35 一二町を越つ、移り行。其中の人うつし

「 2 オ

「 1 ウ

18 かれぬ―かくれぬ(群)

20 凡―予(扶)

21 此かた―ナシ(正) 21 送る―送る(扶) 送れる(群)

21 まに―あひだに(正・扶) あいたに(群) 22 去―去に(群)

し(群)

25 出来て―出来りて(正・群)

26 省などまで―省まで(正) 省まで(扶)

27 一夜か―一夜の(群) 27 灰―塵灰(扶・群)

28 出来ける―出来たりける(群)

29 ことく―とかく(正・扶) とく(群)

30 たる―たるか(群)

33 光―火の光(正・扶・群)

34 風に―ナシ(群) 34 絶す―堪す(正・扶・群)

35 うつし―うつ、(正) うつ、(扶)

心あらんや。あるは煙にむせひてたふれふし、あるは
ほのふにまかれて忽にしぬ。あるはまた、わつかに
身一からくしてのかれたれとも、資財を取出るに
及はす。七珍万宝さなから灰燼となりなき。

40 その費いくそはくそ。此度公卿の家十六焼

たり。まして其外^ハ数へ記すに及はす。すへて都
の中三分か一に及へりとそ。男女死ぬるもの数^皆

千人、馬牛の類は辺際をしらす。ひとのいとなみ^皆
愚かなるなかに、さしもあやうき京中の家

45 を作るとて、たからをついやし、心を悩ます事は、

すくれてあちきなくそ侍るへき。また、治承四

年卯月廿九日、中御門京極のほとより大い

なる辻風^起おこりて、六条わたりまていかめしく

吹ける事侍き。三四町をかけて吹まはる

50 まゝに、其中にこまれる家とも、大なるもちいさき

も、一として破れさるはなし。さなから平に倒

たるもあり。けたはしらはかり残れるもあり。また、

門の上を吹はなちて四五町か程におき、また

「2ウ

36 あらん―ならむ(正) 36 あるは煙―あるひは煙(正・扶・
群) 37 あるは―あるひは(正・扶・群)

41 其外^ハ―其外は(正・群) 41 数へ記すに及はす―かずし
らず(正)

43 類は―類ひ(正・扶・群) 43 いとなみ^皆―いとなみみな(正・
扶・群)

47 廿九日―廿九日の比(正・扶) 47 大いなる―大なる(正・
扶・群)

49 吹まはるまゝ―吹まくる間(正)

垣を吹はらひてとなりと一になせり。況や家の

55 中のたから、数を尽して空にあかり、檜皮・ふき

板の類ひ、冬の木の葉の風にみたる、か如し。

ちりを煙のことく吹たてたれば、すへて目も見

えず。おひた、しく鳴とよむ音に、物いふ声も

聞^えす。地獄の業風なりとも、かはかりにこそは

60 とぞ覚ゆる。家の損亡するのみならず、是を取

つくらふまに、身をそこなひてかたはつ^残けるもの

数をしらす。この風ひつしさるのかたに移り

行て、多くの人の歎をなせり。辻かせは常に

吹ものなれと、かゝる事やはある。たゝ事に

65 あらず、さるべきものゝさとし哉とそうたかひ

侍りし。また、おなし年の水無月の頃、には^鹿かに

都遷侍りき。いと思ひの外なりし事也。大かた

此京の始を聞は、嵯峨天皇御時みやこと定め^ま

りにけるより後、既に四百歳をへたりける。異^{ヒヒ}

70 なる故なくてたやすくあらたまるへくもあら

ねは、是を世の人たやすからす愁あへるさま、こと^理

「 3 オ

55 ふき板—板^{ふき}（扶）

59 地獄—彼地獄（群） 59 かはかりに—かく（正）

60 覚ゆる—覚えける（正）

61 つくらふま—つころふ間（正・扶・群） 61 そこなひて

—そこなひ（正） 61 もの—ひと（扶）

「 3 ウ

68 嵯峨天皇御時—嵯峨天皇の御時（正・扶・群） 68 定め^ま

り—さだまり（正・扶・群） 69 四百歳—数百歳（正）

数^{四百余歳イ}百歳（扶） 69 へたりける—へたり（正・扶・群） 69 異

なる故—こと（正）

はりにも過たり。されと、とかくいふかひなくて、
御門より初め奉りて大臣公卿悉移り給ひぬ。

世に仕ふるほとの人、誰か一人故郷に残らん。官位に

75 思ひをかけ、主君の影を頼むほとの人、一日

なりともとく移らむとはけみあへり。時をうし

なひ、世にあまされて期する所なき者は、愁ひ

なからとまりおり。軒をあらそひし人の

住ひ、日をへつ、荒行、家はこほれてよと川に

80 うかみ、地はめの前に畑となる。人の心皆あらたまり

て、馬鞍をのみ重す。牛車を用とする人なし。

西南海の所領をのみ願ひ、東北国の庄園を

はこのます。其時、自から事のたよりありて、

津の国今の京に至りて。所のあり様を見るに、

85 其地程せはくて、條里をわるにたらず。北

は山にそひて高く、南は海に近くて下れり。

波の音かまひすしくて、塩風ことにはけしく、

内裏は山の中なれば、彼木の丸とのもかく

やと、なか／＼やうかはりて、優なるかたも

「 4 才

「 4 ウ

73 悉―悉撰津国難波の京に（扶）悉撰津国難波の京に

（群） 74 残らん―残りをらん（扶・群）

79 こほれて―こぼたれて（正・群）こほちて（扶）

80 うかみ―うかび（正・扶・群）

81 馬鞍―た、馬鞍（正・扶）

82 のみ―ナシ（正）

84 津の国―撰津国（正・扶・群） 84 至りて―至れり（正・扶・群）

扶・群）

87 音かまひすしくて―音つねにかまひすしくて（正・扶・群）

群）

90 侍りき。日々にこほちて、川もせきあへす

運ひ下す家は、いつくに作れるにかあらん。なほ
空しき地は多く、造れる屋は少し。故郷は

既に荒て、新都はいまたならず。ありとしある
人、みな浮雲の思ひをなせり。もとよりこの所に

95 居る者は、地をうしなひて愁へ、今移りすむ

人は、土木の煩ある事を歎く。道の辺を見

れば、くるまに乗へきは馬にのり、衣冠布衣な

るへきは直垂多くをきたり。都の條里たちまちに

あらたまりて、唯ひなひたる武士にこと

100 ならず。是は世の乱る、瑞相とか聞置るも

しるく、日をへつ、よの中うきたちて、ひとの

心もおさを治まらず、民の愁終にむなしからず

からさを治りければ、内年同の冬、なほ此京に

105 家ともはいかになりけるにか、ことく元の

様にもつくらす。ほのかに伝へ聞に、いにしへの

かしこき御代には、あはれみをもて国を治め、則

「5才

91 家は―家（正）

93 あり―ある（扶・群）

94 人―人は（扶・群）

95 居る―居れるれ（扶）居れる（群）

98 は直垂―はおほくひた、れ（扶・群）98 條里―てふり

（扶・群）98 たちまち―たちまちに（正・扶・群）99 あ

らたまりて―あらたまり（群）100 乱る、―乱る（正・扶・

群）

102 むなしからずから―むなしから（正・扶・群）

103 内年―同年（正・扶・群）

104 給ひぬにき―給ひにき（正・扶・群）

105 家ともは―家共（正）105 なりける―なりにける（正・扶）

106 にも―にしも（扶・群）

107 治め―治め給ふ（扶・群）

御殿にかやをふきて、軒をたにもとゝのへす。

けふりのともしきを見たまふ時は、かきりある

110 貢ものをさへゆるされき。是、民をめくみ世を

たすけ給ふによりてなり。今の世の中のあり

りさま、昔になすらへてしりぬへし。養和の頃

かとよ、久しくなりてたしかにも覚えず。二年

か間^{世中}飢渴して、浅ましき事侍りき。あるは

115 春夏日照、あるは秋冬大風大水なとよからぬ事

とも打つゝき、五穀ことくくみのらず。空しく

春耕し夏^{うゑ}ふるいとなみのみ有て、秋刈冬

収るそめきはなし。是によつて、国々の民、あるは

地を捨堺をいて、あるは家を忘れて山に

120 住。さまくの御祈はしまりて、なへてならぬ

法とも行はるれと、さらに其しるしなし。京の

ならひ、なにはにつけてもみなもとは田舎をこそ

たのめるに、絶てのほるものなければ、さのみ

にはみさほも^{操を}作りあへん。念しわひつゝ、さまくの

125 宝物かたはしより捨ることくすれとも、更に

「 5ウ

「 6オ

111 ありりさま―有さま（正・扶・群）

112 養和―又養和（正・扶・群）

114 間^{世中}飢渴―間^{世中}飢渴（扶）間世中飢渴（群）

116 つゝき―つゝきて（扶・群）

118 よつて―よりて（扶・群）

119 捨―すて、（正・扶・群）

120 さまくの―様々（正）120 はしまりて―はじまり（正）

はしまり^て（扶）121 るれと―るれども（正・扶・群）

122 なには―なにわさ（扶・群）

124 には―やは（正・扶・群）124 さまくの―ナシ（正）

125 捨ることく―捨るかことく（扶・群）

めたつる人もなし。たま／＼かふるものは、金を輕し
粟を重す。乞食道のへに多く、愁へ悲しふ

声み、にみてり。先のとしかくのことくからくして

暮ぬ。明る年はたちなほるへきかと思ふほと

130 に、あとかたなし。世の人みな飢死ければ、日をへつ、

きはまり行さま、少水の魚のたとへに叶へり。

「 6 ウ

果は、笠うちきあしひきつ、身よろしきすかた

したる者、ありくかと思はれは則たふれ臥死ぬ。つい

ひちのつら・路頭に飢死ぬるか類ひは、数もしらす。

135 とり捨るわさもなければ、臭き香世界にみち／＼て、

かはり行かたち・有様、めにあてられぬ事多かり。

いはむや、河原などは馬車の行ちかふ道たにもなし。

あやしき賤山かつも力つきて、薪にさへともしく

成行は、たのむかたなき人は、みつから家をこほちて

140 市に出てこれをうるに、一人か持て出たるあたひ、猶

一日か命をさ、ふるたに及はすとそ。あやしき

事は、かゝるたき、の中二丹つき、白かね・こかねの

はくなど処々につきて見ゆる木のわれ、あひ

「 7 オ

126 めたつる——目見たつる（正・扶・群） 126人も——人（正）

128 先——前（扶・群）

129 ほと——ナシ（正）

130 あとかたなし——あまさへゑやみ打そひてまざる様に、

跡かたなし（正・群）あまさへゑやみ打つ、きそひてま

ざる様に、跡かたなし（扶） 132 果は——はてには（正・扶・

群） 132 つ、身——つ、み（正）つ、み身（扶）つ、み身（群）

133 者——者、ひたすら家ごとに乞ありく、かくわびしれた

る者ども（正・扶）者ども（群） 133 臥死ぬ——死ぬ（正）

ふしぬ（扶・群） 134 路頭——路の頭（扶・群） 134 飢死ぬる

か——飢死ぬる（正・扶・群） 134 数も——かず（正） 136 め

に——目も（正・扶・群） 137 などは——などには（正・扶・群）

138 薪に——薪（群）

140 これを——ナシ（正） 140 持て出たる——持出ぬる（正）

持出たる（扶） 141 さ、ふる——さ、ふるに（正・扶・群）

143 など——ナシ（正）

ましれり。是をたつぬれば、すへきかたなきもの、

145 古寺にいたりて、仏をぬすみ堂の物の具を破

り取て、割くたけるなりけり。濁惡の世にしも

生れ合て、かゝる心憂わさをなん見侍りき。

また、いとあはれなる事侍りき。さりかたき女男

なともちたる者は、其思ひ増りて死をいそぎ

150 必先たちて死ぬ。そのゆへは、我身をはつきに

なして、男にもあれ女にもあれ、いたはしく思ふ

かたに、たま／＼乞得たるものを先ゆつるによりて也。

されは、親子あるものは、さたまれるならひにて、

親そ先達て死にける。父母か命つきてふせるを

155 しらすして、いとけなき子の、其乳ふさにすひ

つきつ、ふせるなとも有けり。仁和寺に慈尊院の大

藏卿隆曉法印とていふ人、かくしつ、数しらすしぬる

事を悲しみて、聖をあまたかた^話らいつ、其首の

見ゆることに、ひた^顔いに阿字を書て、縁を結はしむ

160 るわさをなんせられける。其数をしらんとて、

四五両月かほとかそ^数へたりければ、京の中一条

「 7 ウ

147 侍りき―侍りし (扶・群)

148 いと―ナシ (正)

149 思ひ―心ざし (正) 149 死をいそぎ―ふかきは (正)

志ほ^{イモ}かきは (扶) 志ほそきは (群) 150 先たちて死ぬ―死

す (正)

153 親子―父子 (正) 153 ならひ―事 (正)

154 父―又 (扶)

156 慈尊院の大藏卿―ナシ (正)

157 とて―と (正・扶・群)

158 首―死首 (正)

159 ひ^顔たいに―ナシ (正)

160 数―人数 (扶) 人数 (群)

161 一条より―一條よりは (扶)

より南、九条より北、京極より西、朱雀より東、道の辺にあるかしら、すべて四万二千三百余^なふん有ける。いはんや、其前後にしぬるものも多く、

「 8 オ

165 河原・白川・西の京もろくの^{は説}辺地などを加へていは、
際限あるへからず。いかにいわんや諸國七道をや。

166 際限—際限も（正・扶・群）

近くは崇徳院の御位の時、長承の頃かとよ、かゝるためしは有けると聞と、其世の有様はしらす。まの

168 ける—けり（群）

あたり、いとめつらかにかなしかり^しつる事也。また、

169 つる—し（正・扶・群）

170 元暦二年の頃かとよ、大^{地震}なみふる事侍りき。其様、

170 かとよ—ナシ（正・扶・群）

世の常ならず。山崩れて川を埋み、海かたふきて

171 世の—ナシ（正） 171 山—山は（扶・群） 171 海—海は（扶・

陸をひたせり。土さけて水湧出、巖われて

群） 172 陸—陸地（扶） 172 湧出—わきあがり（正） わきあ

谷にまろひ入。渚漕舟は波にた、よひ、道行駒

171 かり（扶）

は足のたちとを迷^まはせり。況や都の辺には

174 たちとを—立と（群） 174 迷^まはせり—まどはせり（正・扶・

175 在々所々堂舎塔廟、一として全からず。あるは

「 8 ウ

くつれ、あるはたふれたる間、塵灰たちあかりて

176 たる—ぬる（扶・群）

盛なる煙の如し。地の震ひ家の破るゝ音は、

177 音は—音（正・扶・群）

いかつちにことならず。屋の中におれは、忽に

178 屋—家（正）

打ひしけなんとす。走り出れば、また地われさく。

162 京極より—京極よりは（扶・群） 162 朱雀より—朱雀より
りは（扶・群） 163 ふん—なむ（正・扶・群）

180 はねなければ、空へもあかるへからず。龍ならねは、

雲にのほらん事難し。恐れの中に恐るへかりける

は、只地震なりけりとこそ覚え侍りし。其中に、

あるもの、ふのひとり子の、六七はかりに侍りしか、

ついひちのおほひの下に小家を作りて、はかな

185 けなるあとなし事をして遊び侍りしか、

に崩れうめられて、あとかたなくひらに打ひさ

かれて、眼ふたつのなと一寸はかりうち出されたるを、父

母抱へて、声を惜をおします悲みあひて侍りこそ、

あはれにかなしく見侍しか。子思は愛のかなしみには猛き

190 ものも恥を忘れけりと覚えて、いとおしく理ことはり

かなとそ見侍し。かくおひた、しくふることは、しはし

にてやみしかとも、其名残しはしは絶す。よの

常に驚くほどの地震、二三十度ふらぬ日はなし。

十日廿日は過日にしかは、やうく間遠になりて、あるは

195 四五度、二三度、もしは一日ませ、二三日に一度など、

大方其名残三月はかりや侍けむ。四大種の中に

水火風は常に害をなせと、大地に至りてはことなる

「 9 ウ

「 9 オ

181 雲に―雲にも（扶）

182 こそ―そ（正）

185 か、に―が、俄に（正・扶・群）

187 眼―二の目（正・扶・群）

188 声を―声も（正・扶・群）

192 やみしかとも―やみにしが（正）やみにしかかともイ（扶）や

みにしかとも（群）192 名残―余波（正・扶・群）194 廿日は

―廿日（正・扶・群）

変をなさす。昔、齊衡の頃かとよ、大なる^{地震}ふり
て、東大寺の佛のみくし落なとして、いみ

200 しき事とも侍りけれども、猶^{この}たひにはしかす

とそ。則、人皆^{無氣}あちきなきことを述て、聊心の

にこりも薄らくかとみし程に、月日かさなり年

越しかは、後は言の葉にかけていひ出る人たに

なし。すへて世の有にくき事、我身と栖との

205 はかなくあたる様、かくのことし。いはんや

所により身のほとにしたかひて、心をなやます

事、あけてかそふへからす。もしおの^自つから身

かなはすして、権門のかたはらに^居ゐるものは、

ふかく歎ふ事はあれと、大にたのしむに

210 あたはす。歎きある時も、声をあけてなく事

なし。進退やすからす。立居につけて恐れ懼

さま、たとへは雀の鷹の巢に近づけるか如し。

もしまつしくして富る家の隣^{を居}におるものは、

朝夕すほきすかたを恥て、へつ^詔ら^ひいつ、出入。妻子

215 僮僕のうらやめるさまを見るにも、富る家の

「 10 才

200 けれども―けれど(正・扶・群) 200 猶^{この}たひ―猶此たび(正・扶・群)

203 しかは―し(扶)

205 かく―またかく(群)

207 事―事は(扶・群)

208 かなはす―かすならす(扶)

209 あれと―あれども(正・扶・群) 209 たのしむ―樂しふ(正・扶・群)

210 歎きある―歎せつなる(扶)

212 さま―ナシ(正)

213 まつしくして―まつしく(群)

215 さまを―さま(群)

人なゐかしろ成けしきを聞にも、心念々に

動て時としてやすらかならず。もしせはき地

に居れは、近く炎上するとき、其害をのかる、事

なし。辺地もじにあれば、往反わつらひ多く、盗賊

220の難はなれかたし。又、いきはひある者は貪欲

ふかく、ひとり身なるものは人にかかるしめらる。宝

あれはおそれ多く、貧しければ歎切なり。人を

たのめは、心恩愛につかはる。世に随へは、身くるし又

したかはねは、狂へるに似たり。何れの所をしめ、いか

225なるわさをしてか、しはしも此身を宿し、玉

ゆらも心をなくさむへき。我身、父方の祖母の

家をつたへて、久しく彼所にすむ。其後、縁かけ

身おとろへて、しのふかたくしけかりしかは、

ついに跡とむる事を得ずして、三十余

230にして更に我心と一の庵を結ぶ。是を有し

住居になすらふるに、十分か一なり。たゝ居

屋はかりをかまへて、はかしくは作るに及はず。

わつかについちをつけりといへ共、門建るに

「 10ウ

216 人―人の（正・扶・群）

217 やすらかならず―やすからず（正・扶）

219 辺地―もし辺地（正・扶・群）

220 はなれかたし―はなはたし（扶・群） 220 又―ナシ（正）

221 かるしめ―かるしめ（群）

223 心恩愛につかはる―身他のやつことなり、人をはごく

めは、心恩愛につかはる（正・扶・群） 224 したかはねは

―又、したかはねは（正・扶・群） 224 狂へる―狂せる（扶）

226 父方―父の方（扶）

229 跡とむる―心と、むる（扶）

232 は作る―は屋を作る（正・扶・群）

233 ついち―つひち（正）

「 11オ

たつきなし。竹を柱として車宿りとせり。

235 雪降風吹ことにあやうからすしもあらず。

所はかはら近ければ、水の難ふかく白波の恐もさはかし。すへて、あらぬ世を念し過しつ、

心をなやませる事は、三十あまりなり。其

間、折々のたかひめにおのつからみしかき運を

240 さとりぬ。則、五十の春を迎へて、家をいて

世をそむけり。もとより妻子なければ、捨

かたきよすかもなし。身に官祿あらず、何に

つけてか執をとゝめむ。空しく大原山の雲に

臥て、また五婦りの春秋をなむ経にける。

245 爰に六十の露消かたに及びて、さらに

末葉のやとりを結へる事あり。いは、^な狩

人の一夜の宿をつくり、老たるかい^まこの眉

をいとなむことし。是を中頃のすみかになす^そ

らふれば、また百分か一に^にたも及はす。とかくいふ

250 ほとに、よはひはとしくにかたふき、住処は

折々にせはし。其家の有様、世の常ならず。

—
11
ウ

236 難—難も（扶・群）

237 あらぬ—あられぬ（群）

238 あまり—余年（正・扶・群）

244 臥て、また五婦り—いくそばく（正） 244 春秋をなむ経

にける—春秋をかへぬる（正） 春秋をかへぬる^{なんへにけるイ}（扶）

246 ^な狩人—旅人（扶・群）

248 いとなむことし—いとなむがごとし（正・扶・群）

249 たも—たにも（正・扶・群）

ひろさはわつかに方丈、たかさは七尺はかりなり。
所を思ひさためさる故に、地をしめて作ら

す。土居をくみ、うち覆をふきて、つきめことに

255 かけかねをかけたり。もし心に叶はぬ事あらは、
やすく外に移さんかためなり。其あらため造

時、いくはくの煩がある。つむ^所わつかに二両也。車

のちからをむくふる外に、更に他の用途い

らす。今、日野山のおくにあとを隠して、南に

260 仮の日かくしをさし出して、竹のすのこを

しき、其西に閼伽棚を作り、中には、にしの

垣にそへて阿弥陀の画像を安置し奉り

て、落日をうけてみけんの光とす。彼帳の扉に

普賢ならひに不動の像をかけたなり。

265 北の障子の上にちいさきたなをかまへて、

黒き皮籠三四合を置。則、和哥・管絃・往生

要集こときの抄物をいれたり。かたはらに

箏・琵琶、おの^各く一張をたつ。いはゆる折

琴・つき琵琶、これなり。東にそへてはらひの

「 12 オ

「 12 ウ

252 ひろさは―ひろさ(群) 252 はかり―かうち(正) かりイ
ち(扶) 253 さる故―さるか故(正・扶・群)

255 かけたり―かけ^{たりイ}(扶)

257 つむ^所わつかに―つむ所わづかに(正・扶・群)

258 外に―外は(正) 外は^{にイ}(扶) 外には(群) 258 他の―ナ
シ(正) 259 隠して―かくして後(扶・群)

※ 259 南に―275 裁たり―古本系本文を基本とする大きく異なる本文(扶)

262 奉りて―奉り(群)

270 ほとろをしき、つかなみをしきて夜のとき

とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机

をつくり出せり。枕のかたにすひつあり。

是を柴折くふるよすかとす。いほりの北に

少地をしめ、あはらなるひめ垣をかこひて園

275 とす。則、もろくの薬草を栽たり。仮の庵

の有さま、かくのことし。其所のさまをいは、

みなみにかけひあり、岩をたゝみて水を溜

たり。林軒近ければ、爪木をひらふにともし

からす。名を外山といふ。正木のかつら、あとを埋

280 めり。谷しけれと、にしは晴たり。観念の

たよりなきにしもあらず。春は藤波を見る。紫

雲のことくして、西の方に匂ふ。夏は時鳥

を聞。かたらふことに、しての山路をちきる。秋

は日暮の声、耳にみてり。空蟬の世を悲し

285 むこと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。つもり消る

さま、罪障にたとへつへし。もし念佛

ものうく、読経まめならざる時は、みつから

「 13 才

「 13 ウ

272 つくり―ナシ（群）

278 林軒―林の木（扶）林の軒（群）

278 ひらふ―ひろふ（正・

扶・群）

282 西の方―西方（扶・群）

285 こと―と（正）かと（扶）

やすみみつからおこたるに、さまたくる

人もなく、また恥へき友もなし。殊更に

290 無言をせされとも、ひとりおれは口業を収

めつへし。かならず禁戒を守るとしも

なけれども、境界なければ何につけてか

破らん。若あとのしら波に身を寄

るあしたには、岡の屋に行かふ舟を詠

295 て、満沙弥か風情をぬすみ、もし桂のかせ

はちをならす夕へには、潯陽の江を思

ひやりて、源都督のなかれをならふ。もし

あまり興あれば、しはく松の響に秋風の

をたくへ、水の音に流泉の曲をあやつる。芸は

300 是つたなければ、人の耳を悦はしめむ

とにもあらず。ひとりしらへ、ひとり詠して、

心をやしなふはかりなり。又、麓に一の紫の庵

あり。則、此山守か居るところなり。かしこに

小童あり。時々来て相とふらふ。もし徒然なる

305 ときは、これを友として遊びありく。かれは

「 14 才

296 思ひやりて―想像て（正）思像て（扶・群）

298 秋風の楽―秋風の楽（正・扶・群）

300 つたなければ―つたなければ（扶）

301 詠して、―詠じて、みつから（正・扶・群）

302 紫―紫（正・扶・群）

十六、われは六十。そのよはひ事の外なれと、
心を慰る事は、これおなし。あるはつはなを
ぬき、岩なしをとる。また、ぬかこをもち、せり
をつむ。あるはすそわの田井にいたりて、

「 14 ウ

310 落穂をひろひてほくみをつくる。もし

日うら、かなれは、峯によちのほりて、遙

に空を望み、木幡山・伏見の里・鳥羽恋塚・はつ

か師を見^降。勝地は主なければ、心をなくさむる

さはりなし。あゆみ煩なく、志遠いたるときは、

315 これより峯つゝき、すみ山を越、笠取を過て、

あるはいはまにまうて、あるは石山をおかむ。若

は栗津の原をわけて、蟬丸翁かあとをとふらひ、

田上川をわたりて、猿丸大夫か墓をたつぬ。帰

さには、折につけつゝ、わらひを折、木の実を

320 ひろひて、且は仏にたてまつり、且は家の

つとにす。もし夜静なれば、窓の月に

古人をしのひ、さるの声に袖をうるほす。

草村のほたるは、遠く真木の嶋のかゝり

「 15 オ

306 十六——十六歳（正・扶・群）

309 いたりて——おりて（扶）おりて（群）

310 ひろひて——ひろひ（群）

311 うら、かなれは——うらかなれは（群）

312 に空——に故郷の空（正・扶・群） 312 鳥羽恋塚——鳥羽（正・

扶・群） 313 なくさむる——慰むるに（正・扶）

316 あるはいはま——岩間（正） 316 あるは石山——石山（正）

316 若は——もしは又（正） 317 とふらひ——とふらふ（扶）

319 わらひを折——桜をかり紅葉をもとめ蔵を折（正・扶・

群） 320 家の——家（正・扶・群）

火にまかひ、曉のあめは、おのつから木の葉吹

325 あらしに似たり。山鳥のほろ／＼と鳴を

聞て、父か母かとうたかひ、みねのかせきの近く

馴たるにつけても、世に遠さかるほとを

しる。あるは埋火をかきおこして、老の

ね覚のともとす。おそろしき山ならねと、

330 梟の声をあはれむにつけても、山中の

景氣、折につけてもつくる事なし。いはんや

ふかく思ひ、ふかくしれらん人のためには、これに

しもかきるへからす。^{大かた}此所に住ぞめし

時はあからさまと思しかと、今既に五とせを

335 へたり。かりのいほりもや、古屋と成て、軒

には朽葉ふかく、土居苔むせり。おのつから

事のたよりにみやこを聞は、此山にこもりあて

後、やんことなき人のかくれ給へるも数多聞ゆ。

まして其數ならぬたくひ、つくしてこれをし

340 るへからす。たひ／＼の炎上にほろひたる家、又

いくそはくそ。只かりの庵のみ、長閑けくして

「 16 オ

「 15 ウ

326 聞て―聞ても（扶・群）

333 ^{大かた}此所―大かた此ところ（正・扶・群）

334 今既に―今迄に（正・扶）

336 土居―土居に（扶・群）

恐れなし。ほとせはしといへとも、よるふす

牀あり、ひる居る坐あり。一身を宿すに不足

なし。かうな^{寄居虫}はちいさきをかひを好。これよく

345 身をしるによりてなり。みさこは荒磯に

ゐる。則、人をおそる、かゆへ也。我またかくの如。

みをしり世をしれらは、願はず、ましらはす。

た、静なるを望とし、うれひなきをらく

とす。すへて、世人の住所をつくるならひ、かならず

350 しも身のためにはせず。あるは妻子眷属のため

につくり、あるは親昵朋友のためにつくる。あるは

主君師匠及財宝馬牛のためにさへ是を

作る。我、今、身の為にむすへり。人のために作

らす。故いかんとならは、今のよの習ひ、此身の

355 有様、ともなふへきひともなく、たのむへき

やつこもなし。たとひ広くつくれりとも、誰

をかやとす^{し誰をか}へけん。夫ひとの友たるものは、富

るを貴み、ねんころなるを先とす。かならずしも

情あるを直^となるとをは愛せず。た、糸竹花月

「 16 ウ

344 ちいさきを―ちいさき（正・扶・群）

346 かゆへ―によりて（正）^{かゆへイ}によりて（扶）

348 らく―楽ひ（正）たのしみ（扶・群）

349 住所―住家（正・扶・群）

354 ならは―なれば（正・扶）

357 やとす^{し誰をか}へけん―やどし誰をかすへむ（正・扶・群）

359 あるを―有と（正・扶・群）

360をととせんにはしかす。人の奴たるものは、

賞罰のはなはたしきをかへりみ、恩のあつ

きを重す。さらにはこくみあはれむと雖、

やすくしつかなるをは願はず。た、我身を

やつことするにはしかす。もしすへき事あ

365れば、則おのつから身をつかふ。たゆからずしも

あらねと、人を随へ、ひとを顧るよりはやすし。もし

ありく事^{へき}あれば、みつからあゆむ。苦しといへとも、

馬・鞍・牛・車と心をなやますには似す。今、一身を分

ちて、二の用をなす。手の奴、足の乗物、能わか

370心になへり。心また身のくるしみをしれらは、

くるしむ時はやすめつ、まめなる時はつかふ。

つかふとても度々過さす、ものうしとても心を

動す事なし。いかに況や、常にありき常に

うこくは、養生^是なるへし。何そ徒に

375休^{を居}みおらん。人をくるしめ、ひとをなやますは、

ま、罪業^たなり。いか、他のちからをかるべき。

衣食^じのたくひ、またおなし。藤の衣、あさの

「 17 オ

「 17 ウ

361はなはたしきをかへりみ―はなはたしく(扶) 361恩―

恩顧(扶・群) 362あはれむ―あはれふ(正・扶)

364やつこ―奴婢(扶・群) 364もし―いは、我身^をを奴婢と

するならば、もし(扶) 364すへき―なすへき(扶・群)

366やすし―やすく(群)

367ありく事^{へき}―ありくへき事(正・扶・群)

368似す―しかす(扶・群)

370しれらは―しれは(群)

372過さす―すかさす(扶)

374うこく―働く(扶・群) 374^是養生―是養生(正・扶・群)

376ま、―又(正・扶・群)

ふすま、うるにしたかひてはたへをかくし、

野辺のつはな、みねの木の实、命をつく

380 はかりなり。人にまし^はらされは、姿を恥る悔

もなし。かてもし^はければ、おろそかなれ

とも、猶味を甘くす。すへてかやうの事、

たのしく富人に對していふにはあらず。

た、我身一にとりて、昔と今とをたくらふる

385 はかりなり。^{大かた}世を通れ、身を捨しより、

恨みもなく、おそれもなし。命は天運に

まかせて、^をおします、いとはず。身は浮雲に

なすらへて、頼ます、またしとせず。一期の

たのしひは、うた、ねの枕の上にきはまり、

390 生涯の望は、折々の美景に残れり。夫、三界は

た、心^心一なり。もし安^心からずは、牛馬七珍もよ

しなく、宮殿楼閣も望なし。今、さひ

しき住居、一間のいほり、みつからはを愛す。

おのつからみやこに出ては乞食となれる

395 ことをはつといへとも、歸りて爰に居る時は、他

— 18 オ

— 18 ウ

379 命—纔に命(扶・群)

380 ましら^は—ましら(正) ましろ^らは(扶) ましろは(群)

382 事、たのしく—たのしみ(扶・群)

385 はかり—ナシ(正) ^{大かた}385 世—大かた世(正・扶・群)

387 身は—身をは(正・扶・群)

391 もし—心若(正・扶・群)

392 楼閣も—ナシ(正)

の俗塵に着する事をあはれふ。もし人

此いへる事をうたかは、魚と鳥との分野
を見よ。魚は水にあかす。魚に非されは其
心をいかてしらん。鳥は林をねかふ。鳥に

400 あらされはその心をしらす。閑居の気味も
またかくのことし。住すして誰かさたらん。

抑一期の月影かたふきて、余算山の端に
近し。忽に三途のやみにむかはんとす。

何のわさをかかこたんとする。仏の人を

405 教たまふ趣は、ことにふれて執心なかれと也。

今、草のいほりを愛するも科とす。閑寂に
着するも障なるへし。如何用なき楽を

述て、むなしくあたらし時を過さん。静なる

あかつき、此理を思ひつ、けて、みづから心に

410 問ていはく、世をのかれて山林にましはる

は、心をおさめて道を行はむためなり。

然るを、汝か姿は聖に似て、心は濁にしめり。

住所は則浄名居士のあとをけかせり

「 19 才

397 魚と鳥との――魚鳥の（正）

399 いかてしらん――しらず（正）

401 さたらん――さとさむ（正）

403 とす――時（正）時トシ（扶）

405 趣――おこり（正）

411 行はむため――行はむか為（群）

412 汝か――汝（扶）ナシ（群）

413 住所――住家（正・扶）すみか（群）

といへとも、たもつところはわつかに周

415 梨槃特か行にたにも及はす。もし、これ

貧賤の報のみつから脳ますか、将また妄心

のいたりて狂はせるか。其時、心をさらに

答ふる事なし。たゝ側に舌根をや

とひて、不請の念仏、両三反を申てやみぬ。

420 時に建暦^の二とせ弥生の晦日のころ、

桑門蓮胤外山の菴にしてこれをしるす。

月影は入山の端もつらかりき

絶ぬ光をみるよしもかな

「
20
オ

*第262行の上方余白に、次の朱別筆書込みあり。

西の垣にそへてトアル本多シ従フベシ

「
19
ウ

415 たにも―たも^に（扶）たも（群）

416 妄心―忘心（群）

417 心を―心（正・扶・群）

418 側―ナシ（扶）

420 建暦―建暦の（正・扶・群）
420 晦日の―晦日（正・扶・群）

群）

